

奮然将来蜀版大藏経の刊記・印造記について

牧野 和夫

はじめに

一般的に日本の大藏経通史として見渡した時、奮然の蜀版大藏経将来は期を画す一大事業であったことは誤り無いが、近時の書写一切経研究の進展にもなう新知見の数々によって、奮然の蜀版大藏経将来に関する課題も明瞭になりつつある。

従来刊行をみた書写一切経の報告書は、蜀版大藏経の刊記・印造記のもつ学術的な意味に対して十分な配慮をほらいながらも、原刊記などの「存在」の指摘に止まる傾向があり、原刊記などのもつ「情報」の重みについて踏み込む形で論究されることはなかった。一九八〇年以降に展開し、現在も加速継続しつつある書写一切経の悉皆調査によって詳細な報告書が提供されるに及び、相互の比較検討の要が生じてきたのである。

なお、本稿は浙江工商大学日本文化研究所・早稲田大学宗文化研究所共催の「天台山シンポジウム」(二〇〇八年五月二十九日 於浙江省天台山賓館)において口頭発表させていただいた「十二世紀後末期の日本船載大藏経について」の一部分であり、既刊「十二世紀後末期の日本船載大藏経から奮然将来の蜀版大藏経に及ぶ」(『海を渡る天台文化』二〇〇八

年十二月 勉誠社刊所収)の第二節「奮然将来の蜀版大藏経をめぐる一、二の問題」に該当するが、紙幅の都合もあり各書写一切経報告書採録の「蜀版刊記・印造記」については詳記と分析に及ぶことかなわず省略した。その詳記と分析に係る基礎的な一篇が本稿である。従って既刊前掲論文と同文箇所を比較的多く含む点をここに明記し、ご海容を賜りたく思うものである。あわせて併読を乞う次第である。

一、奮然将来の蜀版大藏経をめぐる一、二の問題

經典開版の功德(「施印」の功德)が、宋代の中国に比して相対的に極めて低いものであったと考えざるをえない十世紀以降の日本において、宋刊将来大藏経のテキスト上にもちえた「重み」、更には本奥書識語「宋奉勅版」が「梓」としてどれほど機能しえたか、所謂宋代の奉勅版経の「權威」は日本においていかなるものであったか、問題は複雑である。牧野「十二世紀後末期の日本船載大藏経から奮然将来の蜀版大藏経に及ぶ」(『海を渡る天台文化』勉誠社刊)に指摘した如く道家の版刻の営為がすべて「唐土」で行われたことと緊密に絡むものとなる。

一切経に関する研究については、これまでの研究蓄積は、古代、中

世を通じて重厚なものがある。特に最近年の院政期から中世前期の書写一切經に関する充実した研究として、中尾莚「院政期の松尾社における一切經供養をめぐる」(伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』法蔵館、二〇〇二)、関連論考として同「平安写經の世界―妙蓮寺藏『松尾社一切經』をめぐる―」(『仏教史学研究』第四〇巻)。落合俊典「報恩藏の一切經について」(伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』法蔵館、二〇〇二)、宮崎健司「奈良時代の一切經について―勘經の意義をめぐる―」(『一切經の歴史的研究』二〇〇四年十二月 佛教大学総合研究所)、齊藤俊彦「一切經と芸能」(『一切經の歴史的研究』二〇〇四年十二月 佛教大学総合研究所)、上川通夫「一切經と中世の仏教」(『年報 中世史研究』第二四号、一九九九)などをあげることができる(上川「日本中世仏教史料論」(二〇〇八年 吉川弘文館))。

また、宋刊大藏經の研究は、二〇〇〇年以降、右論考の前編という位置付けで、上川氏は「一切經と古代の仏教」(『愛知県立大学文学部論集』(日本文化学科編)第四七号、一九九八)を発表されている。

法成寺が天喜六年(一〇五八)に焼失し大藏經も失われた、と考えられ、実物に即した研究はもとよりありえないこともあり、奄然の蜀版大藏經将来が後の書写大藏經のテキストとして具体的な經典上に与えた影響について考察した論考は少ないように思う。「少なからず」残存する奄然将来の蜀版大藏經所収經典の原刊記・印造記に着目し、整理・分析することから始める。

手がかりとなる平安中後期から院政期にかけての現存する書写一切經の報告書や平安中後期から院政期にかけての書写經を多量に含む鎌倉期書写一切經の暫定版報告書が以下の通り提供されている。

海野圭介「金剛寺一切經目録(暫定版)」(落合俊典『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究(科学研究費補助金基盤研究(A)・(1)研究成果報告書』所収、二〇〇四年)

京都府教育委員会「京都府古文書調査報告書第十三集 興聖寺一切經調査報告書」、一九九八年

大和郡山市教育委員会「大和郡山市 西方寺調査報告書」、一九八四年

これらの比較的最近の報告書類の分析・整理は、今後の課題として残すことにしたい。今回は、公刊された左記六藏の目録によって整理・分析した。比較的に整理・分析のし易い「かたまり」として平安中後期から院政期にかけての書写一切經の姿が残る、と考えられるからである。

○名取新宮寺一切經(東北歴史資料館「名取新宮寺一切經調査報告書」、一九八〇年

○七寺一切經 『尾張史料 七寺一切經目録』(一九六八年三月、七寺一切經保存会)

○松尾社(妙蓮寺)一切經(七帖)(『京都妙蓮寺藏』松尾社一切經調査報告書 一九九七年)

○中尊寺一切經 『水原堯栄全集』第四卷(一九八一年十二月 同朋舎)所収「秀衡經目録」

○法隆寺一切經(『法隆寺の至宝』第七卷 一九九七年三月)
(今回は大谷大学藏法隆寺一切經を中心にした科研報告書は参考にしていない)

○石山寺一切經(『石山寺の研究』一切經編)

先ず各々の一切経に本奥書(刊語・印造記)「大宋……奉勅雕造/太平興国八年奉勅印」を残す経典に何があるか、を拾い、経名リストを作成する。

凡例

- 〓 齋然将来蜀版刊記・印造記を持つ。
- △ 〓 同名経典・同巻次であるが、齋然将来蜀版刊記・印造記を持たない。
- × 〓 同名経典がない。
- × (※) 〓 同名経典の同巻次を持たない。或は、経典名の同定が難しい場合。

7	6	5	4	3	2	1	所蔵寺社	
阿毘曇毘婆沙論	梵志計水浄経	大乘五蓮論	阿毘曇毘婆沙論	孔雀王呪経	作仏形像経	大乗金剛經	署名	中尊寺
	(観心寺秀衡経目録ニアリ)蜀刊印造記有無不明						法隆寺	石山寺
△巻三十	〔平安〕写	×	×	△	×	〔久安元年〕写	松尾社	七寺
(巻三十欠)	△(※)	○	△	○	△	〔平安〕写	七寺	名取新宮寺
〔院政期〕写	△	〔院政期〕写	〔仁平三年〕写	〔院政期〕写	〔室町〕写	〔久安元年〕写	七寺	名取新宮寺
斐交り楮紙	×	楮紙(漉返し)	楮交り斐紙	楮交り斐紙	楮交り斐紙	楮交り斐紙	松尾社	七寺
	×	×	校本・梵尺寺本	校本・清水寺本			松尾社	七寺
美濃国書写カ	×	×	(安元三年四月九日写)				七寺	名取新宮寺
(巻三十欠)	△(※)	○	△	△	△	〔鎌倉中期〕写	七寺	名取新宮寺
〔平安末期〕写	△(巻三十)	〔平安末期〕写	〔鎌倉中期〕写	〔鎌倉中期〕写	〔鎌倉中期〕写	〔鎌倉中期〕写	七寺	名取新宮寺
斐交り漉紙(黄)	斐交り漉紙(黄)	斐交り漉紙(黄)	斐交り漉紙(黄)	斐交り漉紙(黄)	斐交り漉紙(黄)	斐交り漉紙(黄)	七寺	名取新宮寺

15	14	13	12	11	10	9	8	所蔵寺社	
集諸経礼懺儀	受戒羯磨文	般泥洹経	續集古今仏道論衡	大周刊定衆経目錄	出三藏記集	仏頌一百五十讃	法句経	署名	中尊寺
								法隆寺	石山寺
×	×	×	×	×	○	△	△	松尾社	七寺
×	×	×	×	×	×	×	×	七寺	名取新宮寺
〔明応九年〕写	〔参考〕菅原頼房(公良)写	〔院政期〕写	〔院政期〕写	〔長寛二年頃〕写	〔長寛三年頃〕写	〔院政期〕写	〔院政期〕写	七寺	名取新宮寺
	○	○(巻上)	×	×	○巻二・四	○巻四	○(巻下)	七寺	名取新宮寺
〔安元三年四月二六日写〕	○(巻上)	△	○	△	○(巻十一・十二)	×	△	七寺	名取新宮寺
×	×	×	△	△	一校道胤	〔鎌倉後期〕写	〔平安末期〕写	七寺	名取新宮寺
	×	×	〔鎌倉中期〕写	斐交り漉紙(黄)	斐交り漉紙(黄)	斐交り漉紙(黄)	斐交り漉紙(黄)	七寺	名取新宮寺

この齋然将来蜀版刊記印造記を有する十五点の経名の一覧表を電閲して直ちに気づくことは、複数の大蔵経が同じ経巻を有するケースは十三例で、その内五例が、太平興国八年印造の蜀版に基づくことを示す刊・印記をもつことである。

二、名取新宮寺一切經の蜀版刊記印造記

名取新宮寺一切經について、東北歴史資料館『名取新宮寺一切經調査報告書』(一九八〇年)に基づき整理し纏めるならば、奄然将来蜀版刊記印造記を有する四点は全て「平安末期写」の「同一体裁」の經であり、「平安後期に慈恩寺で実施された一切經事業」に付随した「平安末期の慈恩寺經」で、「平安後期の一切經が何らかの事由で失われたのに対する補写」と分類できるのである。

『名取新宮寺一切經調査報告書』(東北歴史資料館、昭和五十五年三月)より、四点の書誌情報を抜書きする。

① 1251大乗五蘊論

書写年代 平安末期 料紙 楮斐交漉紙(黄)
法量 紙数 一〇 全長(四・六)
奥書 (中略)

(本刊記)

「大宋開寶七年甲戌歲奉

勅雕造太平興国八年奉

勅印

(別筆)

「一校了」

完缺 表紙欠、中欠

備考 (首題右脇・別筆)

「一交了」 (P158)

② 1407梵志計水淨經

書写年代 平安末期 料紙 斐楮交漉紙(黄)
法量 紙数 四 全長 一・四
奥書 (本刊記)

「大宋開寶七年甲戌歲奉

勅雕造太平興国八年奉勅印」

完缺 完 (P177)

③ 2331法句經 卷上

書写年代 平安末期 料紙 斐楮交漉紙(黄)
法量 紙数 一四 全長(六・五)
奥書 (本刊記)

「大宋開寶九年丙子歲奉勅雕太平(興、脱カ)国

八年奉勅印」

(別筆)

「一校了」

完缺 表紙欠、首欠 (P292)

④ 2331法句經 卷下

書写年代 平安末期 料紙 斐楮交漉紙(黄)
法量 紙数 一六 全長 七・三
奥書 (本刊記)

「大宋開寶九年丙子歲奉勅雕造

太平興国八年奉勅印」

(別筆)

「一校了」

完 缺 表紙欠 「(P292)

この四点の尙然将来蜀版刊記印造記について、『報告書』は、429頁に「△本刊記・訳場列位写」との項目を立て、

「大乘五蘊論^{二五}(平安末期)

唐の職名など明らかに、新宮寺一切経の本刊記写には誤記が目立つ。「大宋開宝七年甲戌歳奉勅雕造(北宋九七四年)の刊記をもっているいわゆる宋版の勅版(蜀版)一切経が底本として用いられているのである。こうした類例としては、以下のものがあげられるであろう。

梵志計水浄経^{一四七}(平安末期)

「太平興国八年奉勅印」

法句経^{一四七}卷上・下(平安末期)

(上巻では脱(下巻では脱)

「大宋開宝九年丙子歳奉勅雕造太平興国八年奉勅印」

と指摘している。

『大乘五蘊論』・『梵志計水浄経』・『法句経』卷上下の四点に共通するのは、書写年代を「平安末期」とし、料紙を「楮斐交漉紙(黄)」とすること、『大乘五蘊論』・『法句経』卷上下の三点には奥書末に「一校了」と墨書のあることである。特に『大乘五蘊論』については備考欄に「(首題右脇・別筆)「二交了」と重校に関して注記していることに留意したい。「一校并」重校[僧]について『報告書』は、「平安末期の校訂僧集団―蓮忍・実鏡・□^(別)・円慶・永命・源秀・慶妙―が目立っている(頁452)とし、「平安

後・末期の経卷は「黒石口」の事例から、東北地方において書写されたものと推測される。瑜伽師地論・阿毘曇心論の場合、いずれも、地元僧(黒石口)の初校に対して、後述するように、おそらく都周辺から大挙してきた校訂僧が重校しているのは、その写経に大して占める地位の軽重を示している興味深い。また、平安末期校訂僧集団は新宮寺における鎌倉中期Ⅱの礼西以下の校訂僧と同様に、いずれかの寺の大規模な輔写事業にかかわったことは瑜伽師地論の事例からも明らかである。

(中略)蓮仁は「備州」、蓮忍も瑜伽師地論卷八一の奥書に「和州」と記されている。この他にも、校訂僧集団の中には、王法正理論を手がかりとするならば、後筆ながら大乘阿毘達磨雜集論にみえる源秀は「和州」、源鏡は成実論卷九に「山城國」とある。いずれも京都周辺の熟達した校訂僧と推察される。(中略)さきの瑜伽師地論・阿毘曇心論などの事例からも、地元僧と京都周辺からの校訂僧集団が平安末期の一切経輔写を分担しながら遂行しているよううかがえる。平安末期の経卷は大きく料紙の点では、黄斐楮紙(薄手)と黄緒斐紙(厚手)の二系統に分類される。そして先に問題とした平安末期校訂僧集団は黄斐楮紙(やや厚手のものもある)に属する。「(頁456)とまとめ、「すなわち校訂僧集団が担当する経卷は、料紙も書体も一群をなすことから、その集団は校訂のみでなく、執筆僧も含めた一団として把握することができる」と結論するのである。更に展開して「平安末期の二つの大きな系統を、仮にその年紀を手がかりにするならば、成実論卷九の奥書にみえる源鏡の属する校訂僧集団の担当した経卷の書写時期を治承五年(養和元年とするならば、慈恩寺僧定秀瀧城房系統の経卷の書写時期は養和二年となる。この両者は同一経卷の中で入り混じることは全くない。これら

の点は、新宮寺経に属する鎌倉中期Ⅱの経卷は安貞三年＝寛喜元年と寛喜二年の両年でほとんどすべて書写されたことと類似する。すなわち、平安末期の治承五年＝養和元年にまず、第一回目の書写が京都周辺の校訂僧集団を迎えて行なわれ、残りの経卷は翌年の養和二年におそらく慈恩寺僧定秀瀧城房などを中心として書写されたのではないかと。となると、二回の補写事業は同一寺院に関わるもので、それは慈恩寺と考えるのが現段階では妥当性が高いであろう。」(頁458)と推論している。

平安末期の治承五年＝養和元年に第一回目の書写が京都周辺の校訂僧集団を迎えて行なわれた、と推定し、残りの経卷は翌年の養和二年におそらく慈恩寺僧定秀瀧城房などを中心として書写されたのではないかと、と識別しているが、この二回の補写事業はいずれも同一寺院・慈恩寺で行われた、と考えるのが「現段階では妥当性が高い」という。「大乘五蘊論」・「梵志計水浄経」・「法句経」卷上下の四点に共通する料紙「楮斐交漉紙(黄)」が、京都周辺の校訂僧集団を迎えて行なわれた第一回目の書写の料紙か、翌年の養和二年におそらく慈恩寺僧定秀瀧城房などを中心として書写された際の料紙か、定かにはしたがたいが、京都周辺の校訂僧集団を迎えて行なわれた書写作業に、「奄然将来蜀版刊記印造記」移写経群に係るようである。

三、七寺一切経の蜀版刊記印造記

『尾張史料 七寺一切経目録』(一九六八年 七寺一切経保存会刊)に基づき、蜀版刊記印造記を有する六点を全て拾うならば、次の通りである。

①『阿難陀目佉尼阿難陀隣尼經』

(卷本二大宋太平興国八年刊記ヲ書写ス)

安元三年(才次ノ丁酉)四月九日□□書了 「一校了 栄俊」

②『集諸経礼懺儀』卷上(番外一函)

(卷末二刊記写アリ)

「大宋太平興(ママ)二年(丁ノ丑)歳奉勅雕造

太平興国八年奉勅印」

安元參年四月廿六日書写畢如城房「一交了 学藝」卷子本

③『出三藏記集』卷第十一(甲復九函)

卷一ノ十、十三ノ十五 折本(刊記写ナシ)

卷十一

(刊記字アリ)

「大宋開寶九年丙子歳奉勅雕造 太平興国八年奉勅印」一校了 道胤

④卷十二にも同 折本

⑤『統集古今仏道論衡』(甲復十函)

(卷末二刊記写アリ)

「大宋太平興国三年丙子歳奉勅雕造 太平興国八年奉勅印」卷子本

「一校了 蓮定房」の折本も存(重複)

⑥『仏説大乘聖無量寿王経』

(卷末二太平興国八年訳経記アリ)

「七寺一切経現存四、九五四卷」のうち六点にのみ北宋勅版の刊記が残存していることになる。「北宋勅版の刊記をそのまま転写した六點の経典」と、奥書に法勝寺の名が認められる経典、即ち法勝寺金字経を原本

もしくは校本とした二十九點の經典を除く「何も記されていない残り四九一九卷は一体何処の何を藍本としたのであろうか。」として、次のような結論に至っている。

「以上書写テキストの問題について縷縷述べて来たが、「依無尾州於清水寺以法勝寺本書写之」〔禪秘要經卷三〕や「横河青龍藏本書了」〔中阿含經卷十〕という明白な証文のある経卷、北宋勅版の刊記をそのまま書写した六點、また書写原本と断定することは出来ないがその可能性の高い法勝寺本を以つて校合した二十八點、の計三十六點以外何処の寺院の何の経藏本を書写したか特定するまでには至らなかった。しかし、京都六勝寺の筆頭、法勝寺金字經を書写するために京清水寺まで上洛したことを考えると、京奈良の大寺の経藏本を借り出して尾張の地で書写したとは到底考えられない。多度神宮寺や熱田神宮寺の豊富な経藏のことを併わせ考えると無記のもの大半は、美濃伊勢を含めた尾張の地に既に存在していたものと推測して差し支えないであろう。しかもそれらは当時傳來して崇敬された北宋勅版一切經(蜀版)系のものではなく、奈良朝以来の書写一切經が中心を成したのであろう。」

ところで、北宋勅版の刊記・印造記をそのまま書写した六點のうち、二点には書写識語が認められる。『集諸経礼懺儀』卷上には(卷末二刊記写アリ)「大宋太平興國二年丁丑歲奉勅離造太平興國八年奉勅印」安元參年四月廿六日書写畢如城房「一交了 学藝」とあり、『阿難陀目佉尼阿難陀隣尼經』には「卷本二大宋太平興國八年刊記ヲ書写ス」安元三年〔才次／丁酉〕四月九日□□書了 「一校了 栄俊」とある。いずれも安元三年四月の書写である。

『七寺現存目録』によれば、四月の書写經典は次の通りである。

4 / 1	集諸経礼懺儀 卷下	安元三年四月一日午時書写畢	筆師持門房 「一交了 学藝」
4 / 3	転法輪經憂波提舍	安元三年四月三日執筆僧書写了	「一校了 栄俊」
4 / 3	菩薩処胎経卷四	安元三年四月三日巳時許味岡本庄小松山寺	校了 僧叡弁
4 / 3	菩薩処胎経卷二	安元三年四月三日未時許味岡本庄小松山寺	校了 僧叡弁
4 / 4	諸仏要集経卷下	安元三年四月四日校之	僧仁禪 歳満八十
4 / 5	最勝仏頂陀羅尼淨除業障経	安元三年丁酉四月五日辰時書写了	「一交了 栄俊」
4 / 6	仏説一向出生菩薩経	安元三年丁酉四月六日未時書写了	「一交了 栄俊」
4 / 6	諸仏要集経卷上	安元三年四月六日一交了	結縁僧 仁禪歳八十為後生菩提也
4 / 7	仏説無量門破魔陀羅尼経	安元三年丁酉四月七日未時書写了	「一交了 栄俊」
4 / 7	思益梵天問経 卷第一	安元三年四月七日校了	僧仁禪歳八十偏為往生極楽也
4 / 8	出生無辺門経	安元三年丁酉四月八日巳時書写畢	「一交了 栄俊」
4 / 9	阿難陀目佉尼阿難陀隣尼經	卷末二大宋太平興國八年刊記ヲ書写ス	安元三年丁酉四月九日□□書了(コレヲ墨滅ス)

4 / 9	仏説瑠璃王經	安元三年四月九日為結縁「一交了」 「一交了 栄俊」	4 / 21	仏説阿難陀目佉尼呵離陀隣尼經	安元三年 <small>丁酉</small> 四月廿一日 <small>寅庚</small> 酉書 写了「一交了 栄俊」
4 / 9	仏説梵志■羅延問種尊經	安元三年四月九日為結縁「一交了」	4 / 22	仏頂尊勝陀羅尼經(重複)	安元三年 <small>丁酉</small> 四月廿二日 <small>卯辛</small> 午時書了
4 / 10	舍利弗陀羅尼經	安元三年 <small>丁酉</small> 四月十日未時書写了 「一交了 栄俊」	4 / 25	広弘明集 卷第十六	安元三年四月廿五日書写畢 「一交了 栄俊」
4 / 11	金剛頂經觀自在王如来修行法	卷末ニ青竜寺東塔院一切経「トアリ」 安元三年 <small>丁酉</small> 四月十一日 <small>辰庚</small> 巳時書写了 「一交了 栄俊」	4 / 25	弁正論 卷第一	安元三年 <small>丁酉</small> 四月廿五日書了「二校畢 栄俊」
4 / 11	種種雜咒經	安元三年 <small>丁酉</small> 四月十一日 <small>辰庚</small> 申時書写了 「一交了 栄俊」	4 / 25	破邪論 卷下	安元三年 <small>丁酉</small> 四月廿五日書了「一校了 栄俊」
4 / 12	仏説仏頂尊勝陀羅尼經	安元三年 <small>丁酉</small> 四月十二日書写了 「一交了 栄俊」	4 / 26	集諸経礼懺儀 卷上	(卷末に刊記写アリ)「大宋太平興二年 <small>丁酉</small> 歲奉 勅雕造 太平興國八年奉勅印」安元參年四月廿 六日書写畢如城房 「一交了 栄俊」
4 / 13	仏頂最勝陀羅尼經	(卷首ニ沙門彦悰の経序アリ)安元三年 <small>丁酉</small> 四月十三日 日未時書了「一交了 栄俊」	4 / 30	陀羅尼雜集 卷第九	安元三年 <small>丁酉</small> 四月卅日巳時書写了 執筆 道胤 大施主散位大中臣安長
4 / 13	勝幢臂印陀羅尼經	安元三年 <small>丁酉</small> 四月十三日酉時書了 「一交了 栄俊」			この他に、執筆乗花房と「一校了 長昭」の組み合わせで、安元三年四 月には 根本説一切有部毘奈耶雜事卷 卷第十一 安元三年四月一日書写了 執筆乗花房 「一校了 長昭」
4 / 14	妙臂印幢陀羅尼經	安元三年 <small>丁酉</small> 四月十四日辰時書了 「一交了 栄俊」			同 十二 安元三年四月三日書写了 執筆栄賢乗花房 「二校了 長昭」
4 / 15	仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌	安元三年 <small>丁酉</small> 四月十五日午時書了 「一交了 栄俊」			同 十三 安元三年四月六日書写了 執筆乗花房 「二校了 長昭」
4 / 16	出生無辺門陀羅尼經	安元三年 <small>丁酉</small> 四月十六日戌時書了 「一交了 栄俊」			同 十四 安元三年四月七日書写了 執筆栄賢乗花房 「二校了 長昭」
4 / 17	陀羅尼雜集 卷第三	安元三年四月十七日書了 道胤「一校了」			
4 / 17	無相思塵論	安元三年四月十七日午時書写畢「一校了永俊」			

- 同 十五 安元三年四月十日書写了 執筆乗花房
 「二校了 長昭」
- 同 十六 安元三年四月十二日書写了 執筆乗花房
 「二校了 長昭」
- 同 十七 安元三年四月十五日書写了 執筆乗花房
 「二校了 長昭」
- 同 十九(卷末ニ釈音アリ)
 安元三年四月十八日書写了 執筆栄賢乗花房
 「二校了 長昭」
- 同 二十 安元三年五月六日書写了 執筆乗花房
 「二校了 長昭」
- この組み合わせは、安元三年二月中旬から三月初旬にかけての書写
 經典に
- 雜阿含經 卷第四十二 安元三年二月十八日書写畢 執筆乗花房
 「二校了 長昭」
- 同 四十三 安元三年二月廿日書写了 執筆乗花房
 「二校了 長昭」
- 同 四十四 二月廿五日書写了 執筆栄賢「二校了 長昭」
- 同 四十五 筆師 六郎房「二交了 永俊」
- 同 四十六 安元三年三月一日書写畢 執筆乗花房
 「二校了 長昭 円長」
- 同 四十七 安元三年三月八日書写畢 執筆乗花房
 「二校了 長昭」
- とあり、卷四十四・四十五を除くならば、一群のもの、と考えられ

る。こうした執筆僧と「二校」僧の組み合わせには、書写奥書の年月日表
 記に形式的にみて同一なものがある。

執筆乗花房+「一校了 長昭」||安元三年四月□日書写了(畢)

「二交了 栄俊」とするものについては、次の四種類の書写奥書の年月

日表記形式が確認できる。

「二交了 栄俊」|| a 転法輪經憂波提舍 安元三年^{丁酉}四月三日執筆僧書写

了「一交了 栄俊」

b 金剛頂經觀自在王如来修行法 安元三年^{丁酉}四月十

一日^{甲辰}巳時書写了「一交了 栄俊」

c 弁正論 卷第一 安元三年^{丁酉}四月廿五日書了

「一校畢 栄俊」

d 破邪論 卷下 安元三年^{丁酉}四月廿五日書了

「二校了 栄俊」

「卷末ニ大宋太平興国八年刊記ヲ書写ス」と注記された『阿難陀目佉尼呵
 離陀隣尼經』(124P)もまた、「卷末ニ「青竜寺東塔院一切經」トアリ」
 と注記された『金剛頂經觀自在王如来修行法』もともに「二交了 栄俊」と
 ありb型に属す。安元三年の書写識語をもたないが「卷末ニ太平興国八
 年訳経記アリ」と注記された『仏説大乘聖无量寿王經』も、「一交了 栄
 俊」とありb型に属し、おそらく同一の執筆僧グループによる、同一の
 一群の經典群(同一の寺院の一切経が想定される)を底本にした書写活動
 から産まれたもの、と予想される。

治承三年清水寺における書写を伝える一群の経巻が、次のように認
 められる。

尾張史料 七寺一切経目録(昭和四十三・三 七寺一切経保存会刊)

同 堂書写已 筆師境妙房「一校了 栄胤」
下 於清水寺以法勝寺本一交了 円慶

75 P

禪秘要経卷第一 治承三年己亥八月六日於京清水寺書写畢

122 P

筆師 境妙房「於清水寺以法勝寺本一校了

仏説菩薩藏経 卷上 於清水寺以法勝寺本一交了尾州中嶋郡長福寺

円慶」

住永藝

同 二 於清水寺 以法勝寺本一校了 永藝

大方等善住意天子所問経

同 三 依无尾州於清水寺以法勝寺本書写之

卷四 以法勝寺本一交了 円慶

重加校之 円慶「一校了」

大宝積経 「二卷ノ大宝積 廿四枚 鏡音房」

同 四 於清水寺以法勝本書写了「加一校了」

「於清水寺以法勝寺一交了 永藝」

104 P

仏説宝髻菩薩所問経

卷上 法勝寺本一校了□慶(運力)

雜阿毘曇心論卷第十 以法勝寺本一校了 円慶

123 P

仏説毘羅三昧経卷上 於清水寺以法勝本書写了「加一校了」

続高僧伝卷第十三 治承三年大歳寅己八月二日書写畢

「於清水寺法勝寺本一校了」

摩訶般若波羅蜜多経(新小品)

卷第一 治承三年八月十日巳日許書写畢 於清水寺以

121 P

仏説密迹金剛力士経

同 二 於京東山清水寺以法勝寺本一交了 永藝 以法

卷第二 於清水寺以法勝寺本一交了 永藝

同 五 治承三年亥七八月四日京清水寺書畢 筆師円順

同 四 清水寺書畢「以法勝寺一交了 慶俊」

「於清水寺以法勝寺本一交了 円慶」

仏説菩薩夢経 卷上 治承三年己亥八月四日清水寺下葉刃神北小御

大願功德経 一交了 円慶

125P

仏説呪媚経

一交了 慶俊

作仏形像経(1468)

仏説招魂経

一交了 永藝

(刊記)大宋開宝六年癸酉歲奉

浄土経

卷第二 清水寺居書写畢「以法勝寺本一交了 円慶之」

勅雕造、太平興国八年奉

同

三 治承三年^紀八月七日清水寺書畢「以法勝寺本

勅印、(奥書)以清水寺経藏本交了、(花押)

一交了 永藝之」

治承三年の清水寺における書写を伝える一群の写経群について既に

522

阿難陀目■尼阿離(ママ)経(1499)

指摘されるように、筆者として境妙房・円順・鏡音房の名が挙がる

(刊記)大宋開宝六年癸酉歲奉

他、「二校」僧名には円慶・永藝・慶俊が認められる。安元三年四月時点

勅雕造、太平興国八年奉

での書写活動に顕著な「一交了 栄俊」とするものとは異なる書写作業と

勅印、

考えられ、安元三年の書写識語をもたないが「卷末ニ太平興国八年訳経

(奥書)以梵尺寺本一交了、(花押)

記アリ」と注記された『仏説大乘聖无量寿王経』も、「一交了 栄俊」をも

684

ついで清水寺における書写活動の産物の可能性は低く、安元三年四月

受戒羯磨文(1785)

時の書写経典の一群に属する可能性が高い。

(刊記)大宋開宝七年申(ママ)戊歳奉

かくて「兪然将来蜀版刊記印造記」を保存する経巻類は、都において

勅雕造、太平興国八年奉、

”法勝寺本“を底本にしたものではなく、安元三年当時の尾州周辺現存

942

経典類(一切経を含む)を底本(既に尾州周辺に「都」の”法勝寺本“を底

般泥洹経卷上(2283)

本にした経典が齎されていたか)にした可能性の方が高いのである。

四、妙蓮寺一切経の蜀版刊記印造記

『京都妙蓮寺藏』松尾社一切経『調査報告書』(平成九年二月刊)に拠る

(刊記)「大宋開宝七年甲戌歳奉

と、次の八点到蜀版刊記印造記が認められる。

勅雕造、太平興国八年奉

勅印、

1219

法句經卷下(3245)

(刊記)「大宋開宝元年丙子歲奉

勅雕造、太平興国八年奉

勅印、」

1220

一百五十讚仏頌(3257)

(刊記)「大宋開宝九年丙子歲奉 勅雕

造、太平興国八年奉 勅印、」

1225

出三藏記集録上卷第二(3355)

(刊記)「大宋太平興国元年丙子歲

奉勅雕造、

太平興国八年奉勅印、」

1226

出三藏記集録下卷第四(3357)

(刊記)「大宋太平興国元年丙子歲奉

勅雕造、太平興国八年奉勅印、」

『報告書』に従えば、〔平安後期〕写本であり、その内の三点は「印記」欄に「松ク花」とあり、「松尾寺印」「クルミ印」「花押」があることで共通す

る。校合に「清水寺経底本」「梵尺寺本」が用いられたものであり、書写本文も「清水寺一切経」「や」「梵尺寺一切経」などへ遡及しうるのであるが、本文も「二交」僧の手に係るものかどうかの判断はできず、書写本文の底本の特定は推測する手がかりもない。後考に俟つのみである。

五、石山寺一切経の蜀版刊記印造記

田中稔氏「石山寺一切経について」を参照しつつ、石山寺蔵一切経の奄然将来蜀版刊記印造記を有する七帖について整理し、前掲論文において詳細な検討を終えている。従って七帖を列記し、その結論のみを引用する。

①二十函32大乘金剛擊珠菩薩經 (臣)一帖

平安時代久安六年写、楮交り斐紙、一切経黒印ナシ、毎紙背二梵字黒方印(印文未詳)アリ、訓點ナシ、一紙長五七・二糎、界高二〇・四糎、界幅一・九糎、

(内題・尾題) 大乘金剛響珠菩薩修行分

(奥書) 大宋開寶六年 酉歲奉

勅雕 造 太平興国八年奉

勅印(○以上高麗版刊記ノ写シナリ、)

(追筆)

久安六年正月十七日書写了「二交了」

②二十八函24孔雀王呪經 一帖

院政期写、楮交り斐紙、訓點ナシ、一紙長五五・六糎、界高一九・六糎、界幅二・〇糎、

(内題) 大金色孔雀王呪経 結界湯法兵具 印幢陀羅尼経

(刊記写) 大宋開寶六年 西歳奉

(ママ)

勅雕 造太平 国八年奉

勅印

(奥書) 大宋開寶八年乙亥歳奉

勅(朱書)「卷第三十」雕造 大平興国八年奉

勅印

一交了

(以上刊記写)

③四十八函16大乘五蓋論

一帖

院政期写、楮紙(澆返シ)、訓點ナシ、卷末ニ訳場列位アリ、

一紙長五一・五糎、界高一九・九糎、界幅一・九糎、

(訳場列位)

大唐貞観二十年五月十日於長安列／福寺翻経院三藏法師玄奘奉 詔訳

翻経沙門道洪／翻経沙門恵明／

(以下、列位略ス)

(本刊記写) 大宋開寶七年甲戌歳奉

勅雕 造太平興国八年奉

勅印

(奥書) 一交了

⑤七十五函24出三藏記集卷第四

一帖

院政期写、体裁等第21号(卷第一)ニ同ジ(院政期写(長寛二年頃)、斐

交り楮紙)、

但シ斐交り楮紙、一紙長四九・五糎、但シ巻尾三紙ハ楮交り斐紙(一

紙長五一・九糎)、

(内題・尾題) 出三藏記集録下卷第四

(刊記写)

大宋太平興国元年丙子歳奉

勅雕 造太平興国八年奉勅印

○高麗版本ノ写ナルベシ、

⑥七十六函7大周刊定衆経目錄卷第七

一帖

院政期写、体裁等第1号(卷第一)ニ同ジ(院政期写(長寛二年頃)、斐

交り楮紙)、

一紙長五三・五糎、

(ママ)

(刊記写) 大宋太平興周二年丁丑歳奉 勅雕 造

(ママ)

④六十一函41阿毘曇毘婆沙論卷第三十

一帖

院政期写、体裁等題13号(卷二)ニ同ジ(院政期写、斐交り楮紙)、但シ

奥書アリ、

一紙長五五・八糎、

(朱書)「三三

(尾題)阿毘曇毘婆沙論卷第六十

太平興周八季奉草

⑦七十八函 11統集古今佛道論衡

(星)一帖

院政期写、斐交り楮紙、墨書校合、訓點ナシ、見返古外

題、一紙長五四・九糎、界高一九・四糎、界幅一・九糎、

(奥書) 大宋太平興周元年丙子

歲奉勅雕 造太平興周

八年奉勅印(以上高麗版刊記ノ写ナリ、)

「①から⑦に及ぶ経卷書写が、現存卷教の約三分の二を占める念西とその周辺、更に朗澄へと継統されて醍醐寺・勸修寺などにおいてなされたものと推定される。「④六十一函41阿毘曇毘婆沙論卷第三十」と同体裁の「46阿毘曇毘婆沙論卷第三十五」奥書に「勸修寺蓮光房一切経」と記された如く「勸修寺一切経」が活用されたかと類推でき、奄然将来蜀版刊記印造記を有する七帖が、ほぼ「勸修寺一切経」乃至その周辺で書写されたようである。」

六、結び

高野山金剛峰寺が4296卷所蔵する中尊寺一切経や法隆寺蔵一切経にも、本奥書に奄然将来蜀版刊記印造記を有する経卷が現存し報告がある。参考までに列記しておく。

法句経卷下(竺沙雅章氏『宋代仏教文化研究』二〇〇〇年八月 汲古書院刊)

「第三〇五函 出三蔵記集 自卷第二至卷第九 奥書

大宋太平興周元年丙午歲奉勅雕造、

太平興周八年奉勅印、 「『水原克榮全集』四卷(昭和五十六・十

二 同朋舎刊)「秀衡経目録」附奥書目録 頁六〇)

開宝九年・太平興周元年は丙子歳。

「646 法句経卷上(首欠) 平安

一校了、(北宋勅版一切経刊記の写あり)

「大宋開宝九年丙子歳奉勅雕 太平興周八年奉勅印」

各々、ほぼ孤例に近いものであるが、いずれも確認済みの十五種の經典に含まれ重複している点、貴重な参考例となる。

以上の整理・分析によつて、次のような推測が可能となる。

石山寺蔵書写一切経四四八五帖の内、二九一五帖が院政期の書写で、その内、七帖のみ奄然将来蜀版の刊・印記をもつ。七寺蔵大藏経はほぼ院政期書写の四九五四卷の内、六卷が蜀版の刊・印記をもつ。

二五六五卷残存する名取新宮寺蔵一切経は、中心となる鎌倉中期書写本を除き、平安末期の書写(鎌倉中期に蒐集か)数百卷があり、その内、蜀版の刊・印記をもつのは三卷のみである。しかも、蜀版を底本とした経卷を辿り返す時、平安後期・末期書写「石山寺一切経」の場合は京洛の「勸修寺一切経」へ遡及し、尾州の「七寺一切経」の場合は、法勝寺一切経や清水寺・梵尺寺等の一切経経由と考えるよりは、安元三年四月書写の底本となつた一群の經典類(一切経の一部か)へ手繰り返すことができ、また東北の「名取新宮寺一切経」では京周辺ゆかりの僧侶と地元僧と

の本文書写・校合作業を推定しうる〔平安末期写〕慈恩寺一切経へ絞り込まれていくのである。

おそらく、いずれの書写大蔵経も、蜀版刊記印造記を保存する経巻は数量的に至って乏しく、前掲表に列記一覧した十五種の經典名にとどまり、しかも重複するものが少なくない。『出三蔵記集』に至っては調査対象とした五蔵のうち四蔵に認められる。近時紹介された天野山金剛寺藏書写一切経にも本奥書に蜀版刊記印造記を残す二例が報告されたが、その内の一点が『出三蔵記集』であった。

蜀版原刊記・印造記を残す経巻の点数とその分布具合(重なり具合)を以って判断するに、その底本はかたまりとしての“同一”系統の一切経テキスト群に遡りうるのではないかと考えられる。個々の一切経のセット毎に複雑な形成過程を容認しなければならぬが、平安末期頃書写の經典群(数百巻単位)において蜀版刊記印造記をもつ経巻が極く少数にとどまり且つ特定の經典に偏ることは、認めざるを得ない事実である。

それらの平安末期頃の地方寺社へも波及した書写一切経の転写過程を逆に手繰り返すならば、行き着くところの底本の候補として第一に挙げられるものは、法勝寺金字一切経であろう。

法勝寺金字一切経がどのような性格の写経であったか今や知る術がない。もし仮に法勝寺金字一切経が言われる如く尙然将来蜀版一切経を底本に活用した書写経であったとしても、「尙然将来蜀版一切経」の内の極く少量の経巻のみが「欠本」を補う形で活用書写されたのではないかと、との疑念をぬぐいえない。更に、ひとつの憶測を加えてみよう。

遡って、道長・頼通期の書写一切経においても(即ち法勝寺金字一切経

の形成に係わったと目される先行書写一切経の形成においても)、尙然将来蜀版刊記印造記を本奥書に残す(蜀版テキストに拠る)ものは、現在の既に認められる「補欠」経巻分を大きく上回る数ではない、と考える可能性が一方で残されるのではないか。

少なくとも宋代の勅「版大蔵経」の“權威”を意図的にわが国書写一切経の枠としてテキストに取り込むという經典蒐集並びに書写の姿勢は、現存資料から推して平安・院政期の大蔵経書写に際しては想定しがたい、ということである。

勿論、尙然将来の蜀版大蔵経一セット全巻が底本として書写された可能性も依然として残るのである。たとえば、石山寺一切経(勸修寺一切経に遡及)に

〔22出三蔵記集卷第二〕 一帖

院政期写(長寛二年頃)、体裁等第21号(卷第二)二同ジ、但シ奥書ナシ、一紙長五五・二糶、

(内題・尾題)出三蔵記集録上卷第二

○内題ノ下ニ「楹」字アリ、本文ト同筆ナリ、後筆ニ非ズ、

とあり、本文同筆で内題下に「楹」とあることから、大蔵経の千字文番号に該当し、蜀版一切経(千字文番号は高麗版と同じ)を底本とした可能性も残される。中尊寺一切経でいえば、「第七十二函 同(大般若波羅蜜多経) 卷第一〇八奥書 葛昂印」(前掲水原堯榮氏「秀衡経目録」頁57)とある。印造記のみ記した可能性もあり、蜀版大蔵経を底本にしていった可能性は残るが、「葛昂」という刷り手は、捺印「葛昂印」「葛昂印造」として、知恩院藏宋刊大蔵経のうちの開元寺版に多く認められるのであ

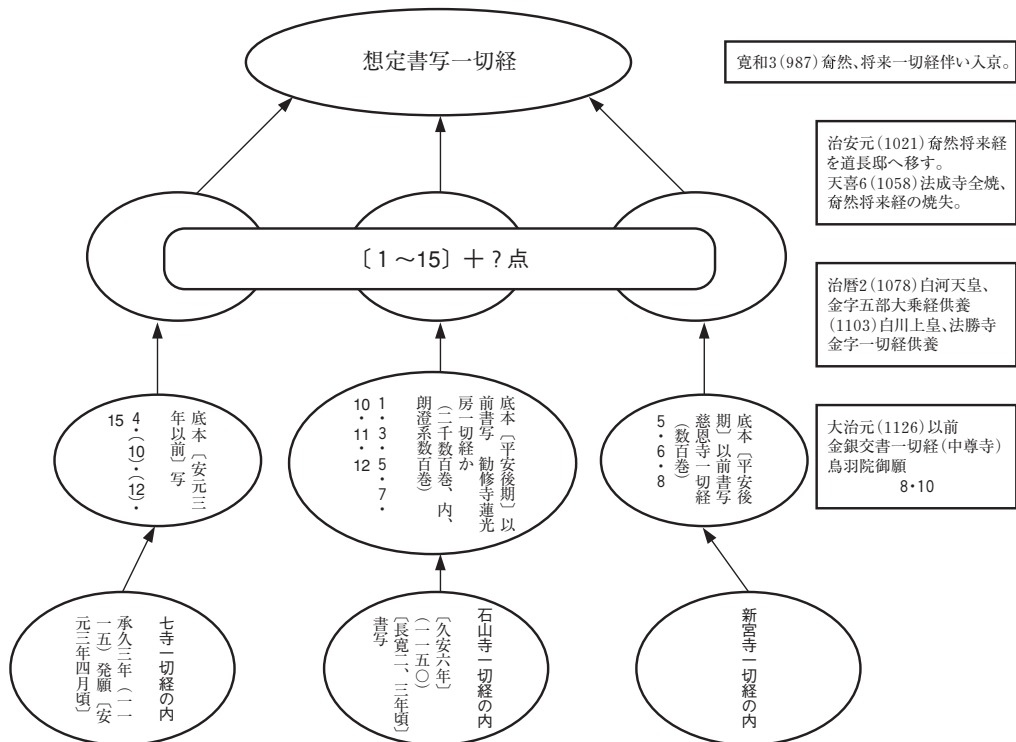
り、開元寺版を底本とした可能性の方が高い。現存中尊寺藏宋刊大藏經が開元寺版・思溪版の混合藏(一部東禪寺版を交える)であることは、興味深い。

以上を簡略な図として示す。勿論、実際は細かで複雑な入り組み合いの「かたち」となるだろう。

本研究は、科研費・基盤研究(A)課題番号20242015の分担研究に拠る研究成果である。なお、開寶藏については、竺沙雅章氏『宋元佛教文化史研究』(汲古書院、二〇〇〇年)所収論考を始め、多くの先学の論考を参照させて頂いた。近時、王丁氏「初論『開寶藏』向西域の流傳——西域出土印本漢文佛典研究(二)——」(『佛敎文献と文學』二〇〇七年刊)がある。

* * *

本稿に関連して、二〇〇八年五月二十九日の口頭発表(二〇〇八年十二月刊拙文は、発表用論文集所収の論文の一部)以後、貴重な報告が行われたので、附記する。天野山金剛寺藏書写一切經に関する、大塚紀弘氏「金剛寺一切經の来歴について」(學術フロンティア第三回公開研究会報告書、二〇〇八年十一月十五日)である。既に、落合俊典氏編『金剛寺一切經の総合的研究と金剛寺聖敎の基礎的研究』所収、後藤昭雄氏作成の略目録によって知られていた事実であるが、『大方広仏華嚴經統入法界品』と『出三藏記集』卷十二に、開寶藏勅版刊記・同印造記が奥識語にある点である。大塚氏は、『大方広仏華嚴經統入法界品』・『孔雀王呪經』の勅版刊記・印造記が、金剛峯寺藏の同經にも存すること、金剛峯寺藏『比丘尼伝』卷四にも、開寶藏勅版刊記・同印造記の存することを加



えられた。本稿の「結び」に展開した推測を、更に強固にするものとして、有益な報告であり、附記させて頂いた。

なお、天台山シンポジウムにおける発表内容のうち、興聖寺藏宗像大社保管の色定法師書写一切経が底本として依拠した宋版大藏経については、概略を前掲『発表資料集』(二〇〇八年五月)・『海を渡る天台文化』(二〇〇八年十一月)に簡叙したが、その詳細な考察は本紀要の次集(五十二集)を予定している。この場をかりて改めて御所藏の興聖寺田代義道師、保管される宗像大社に対して深甚の謝意を表するものである。

最後に、金剛寺一切経に関して払われた、国際仏教学大学院大学・学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」代表落合俊典氏の御高配に深謝申し上げます。

* * *

『海を渡る天台文化』所収稿の一〇三頁の記述に関して、発願時点では、父母ともに存命であることを附記する。今後の課題とさせていただく。